

象限(カテゴリ)	キーワード(一部共通)	第2回懇談会プレスト	具体案(第3回ご意見等より)
① 戦争×子ども(学校教育)	<ul style="list-style-type: none"> ・体験世代から非体験世代への継承は今が最後の機会。 ・「内化」と「外化」。アートの活用。 ・「日常」に着目することの重要性。戦争というのは当たり前の日常をことごとく破壊するもの。 ・体験者本人から聞く話は重さが違う。リアルな体験をどのように保存して活用していくかが重要。 ・戦争関連資料をいかに保存していくか。 ・長崎、広島に子どもたちが行く機会を増やす、その機会を活用する。 ・今の学生は押し付けられることは嫌がる。体験型、参加型が重要。 ・体験していないからこそできる質問もある。若い世代に期待している。 ・伝えないことでニュートラルにしていくという考え方もある。ただ、そういった意見を聞いた上でも伝えていくべき。 ・市民意識調査では、学校教育の中で平和の尊さを教えることが市の取り組むべきことの一番となっている。 ・究極的には戦争のない状態がウェルビーイング。 ・第2次世界大戦だけの話ではない。市内には日清、日露戦争の碑もある。 ・身近な市内で空襲があったという事実は、子どもたちを含めて残していくことが重要。 ・武蔵野の空襲については、他の自治体が継承していくことはかなわない。その部分は力を入れて残していくべき。 ・市の平和事業等について、自分たちで情報をみつけるのは難しい。若い世代にどう広報していくか。 ・ウクライナ侵攻により小中学生の意識が変わってきていることは全国学力調査のアンケートにも表れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験を知る→表現する(アートの方法) ・戦争学習(戦争を知る) ・校外学習①ふるさと歴史館、②広島・長崎・沖縄旅行、③東京大空襲 ・学内での戦争を題材にした映画の上映会→その後講演etc. ・(歴史の授業)4月に戦争の範囲を学習する(3学期は駆け足) ・長崎への平和交流団の継続、拡充 ・戦争体験者を招いて話を聞く ・市内における戦跡の調査(調べ学習) ・戦争について始めた理由、終わった理由などをテーマに話し合う ・長期的な修学旅行へ向けての学習 ・VRによる戦争体験者の語り 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争と聞いたときに、第2次世界大戦のことだけではなくなってきた。子どもたちの意識はそこではなくなってきたということを感じている。 ・中高生アンケートの結果を見ても、ウクライナ問題とイスラエル問題の衝撃は予想通り非常に大きかった。 ・これだけ現在の戦争というものが、子どもたちどころか、大人も含めてリアリティをもって受け止められるということは非常に珍しい。日本にいて、戦争がここまでリアルに受け止められるようになったという今の状況を、平和の学習、戦争の学習へつなげていく、非常にいいきっかけになる。 ・「平和施策の新たな展開」ということについて、「新たな」ということはつまり古いものではない話になるのかという懸念がある。ただ、これからのあり方を考えるうえで、世界の動向についても考えなくてはいけない。 ・やはり武蔵野市の特徴としてやるべきことがある。一番特徴的なのは、身近な市内で空襲があったという事実を、子どもたちを含めて残していくことが第一義的に重要ではないか。武蔵野市の空襲については、ほかの自治体が継承していくことはかなわないため、その部分は力を入れて残していくべき。 ・武蔵野で過去に起こったこと、そしてウクライナやガザで今起こっていることは、背景も規模も違うが、そこで生活していた人々の「日常」が一瞬にして破壊され、失われた。武蔵野の戦争の歴史と、現在の世界の戦争の問題をつなげることができないだろうか。 ・平和教育は楽しくなければいけない。 ・中高生アンケートの結果を見ても、学校教育のインパクトは大きい。 ・「体験の継承」が重要。体験者でなければ語れないのはまさに思いの部分。その思いを伝えるのが戦争体験を継承するという。生きた個人個人の、1人1人の、身近な存在である武蔵野の人が語る戦争体験というのは重みがある。その部分を継承するにはどうしたらいいかということをもっと考えた方がいい。 ・例えば、それを何か別のものに表現するというのが、絵にするとか、何か表現するというものに出口が繋がっていくと、なお身近なものになる。 ・体験者の話を聞いて、それを絵にする、音楽にする、劇にするなど、アートの領域で表現する。 ・アートの領域は真似ができないし、必然的に向き合う時間が長くなる。非常に効果的である。 ・平和施策を考えるにあたっては目標が必要。 ・目標を考えるときに、ディープな部分と、なるべく広く告知する、知らせる、啓蒙というか、その両方のターゲットを持っていたほうがよい。同時に、学校とか、重点を置く拠点があるといい。ふるさと歴史館や学校、コミセンなど。自分の足で向かって見に行くものと、広く市民に普及する部分とその両方が意識されなければならない。 ・目に見える、多くの人に広げるものは、例えば、まちなか博物館とか、まちなかに掲示板があり、その掲示板に昔の武蔵野の姿がいつでも見られるようになるとうい。 ・広い多くの人を対象にした目標と、より深く訴えかけるとい目標と、大きく2通りの方向性でいろいろ考えてみるのが有効。 ・このアンケートの中で、楽しく学習するということを見ると、あと、戦争体験者の話を聞いたり、平和資料館に行くことが重要だと思うということを子どもたち自身が答えていることを見ると、例えば、広島・長崎への修学旅行だとか、あるいは長崎への平和交流団の継続・拡充ということは、今後、子どもたちをキャッチするのにいい。 ・平和問題懇談会でも、柔軟性の高い子どもたちに学習をさせることが将来の気づきにつながるという提言があった。子どもたちを対象にするものというのは今後も重要視していくべき。 ・懸念するのは、アートの実現、学習、修学旅行先ということを学校にいろいろ提言したときに、どれだけそれを受け止め切れるのかという心配がある。今、教育委員会も学校現場が非常に忙しいということも聞いている。 ・もし学校がやろうと思ったときにすぐ使えるものを用意するところまではできるか。
② 戦争×大人(社会教育)	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争の遺品等の貸し出しセット(歴史館→学校) ・体験の「伝承者」の相互学習会(中学生～大人、専門家を交える) ・夏休み親子で学ぶ「戦争と平和」(武蔵野中央公園、自然文化園などで開催、フィールドワーク) ・遺品等保存のための専門的取組み ・長崎、三鷹(駅前)の男女平和像レクチャー&現地ツアー ・市内空襲に関する講座、ふるさと歴史館事業として ・大人向け研修①東大和変電所跡、②登戸研究所跡(明大)、③東京大空襲戦災資料センター ・できるだけ事実を伝えることができるよう大人も学ぶ ・「平和カフェ」を町ごとに開催する ・武蔵野市にゆかりのある芸能人によるYouTube?→若い世代へのアプローチ ・武蔵野市だけでなく多摩全域にある戦争史跡巡り ・市内空襲についての歴史ガイドの育成 ・街中に大型写真を掲示 ・街中にプロジェクターで戦争の時代をうつしだす、街中「博物館」「歴史館」 ・戦争史料のアーカイブ化 	<ul style="list-style-type: none"> ・一番急いで取り組まなければいけないのが、遺品等保存のための専門的取り組みである。 ・かつての戦争の遺品とかが劣化していくという状況の中で、どう保存するか。あるいは、例えば、戦争体験者がお亡くなりになったときに、その遺品を遺族の方が博物館に提供してくださる。それが相次いでくると、逆に保存ができなくなってしまうという問題に各地の平和博物館が直面しているという話も聞く。 ・緊急に手を付けなければいけない分野である。武蔵野市の場合だと、幸いふるさと歴史館があり、そういう専門学芸員もいらっしゃる、そういったところとかかわりを持って、遺品保存のための取り組みは待たなしでこの懇談会の提言案として出したい。 ・それと同時に、市内にそれ以外の様々な戦争関係の資料をお持ちの方、例えば中島飛行機関係の方で、中島飛行機でお勤めになられていた方が引き継がれていた資料も、実は探すとして出てくる可能性がまだまだある。それをワンセットでいろいろな意味で武蔵野市において「もので語らせる」というのはすごく重要なことだと思う。調査研究及び資料の収集保管、適切な保存、そして活用、そこまで含めて、今回の平和施策のあり方の中にメニューとして盛り込めるといい。 ・保存しているものをどのようにして展示をするか。つまり、知らせるかという問題も出てくる。 ・現在、いわゆるデジタルの発達の中で、アーカイブとしてそれをまとめたものをWEB上で公表するというのを、これは平和の問題に限らず、いろいろな博物館が相当取り組んでいる。専門家の意見を求めれば、いろいろな方法が出てくる。 ・体験の伝承者をどう育てるかという問題もある。 ・先駆的に行っている国立市では、伝承者同士での学習会を行っている。伝承を目指す人たちでの相互学習会を重ねて、専門家の助言も受けながらやっている。 ・武蔵野空襲の新たな伝承者を育てるという試み、これは学校と連携をすることで、可能になるのではないかなと思う。 ・学校だけではなくて、地域のコミセンを核にして、そういうこともできるのではないかな。 ・自主3原則の自主性というところがあり、すごく自由にできるという点ではいいと思う。 ・コミセンという武蔵野市ならではのものがあるのであれば、ぜひそれも活用していければいい。それこそ、子どもたちと大人たち、学校と大人たちを結びつける場としても機能する。 ・大人を対象としたときに、スポーツと平和を結びつけられるとうい。若い世代にとっては仕事等で忙しい休日に、スポーツのほうをやりたい、行きたいと思う。そういう際に募金の機会を設けるなど平和について意識をする機会をふやしたほうが、若い世代には響くのではないかな。 ・今の話はすごくポイントを突いている。少なくとも、例えば平和を考えると、戦争のことを意識するとかという入り口で入ってきてというのは間口がすごく狭い。いろいろな人がアプローチする間口の広いところからたどって行って、こういうことも考えられるよねというのにとどりに着くような仕掛け、広い意味でつかまえていく部分がすごく必要なかなという感じがした。 ・スポーツというのはすごくいいツールだと思っていて、やっぱり楽しい。楽しくなくてスポーツをやる人はあまりいない。楽しいところから入ったら、その中でこういうことが実は背景にあるということわりと親和性がある。 ・大人にしても、子どもにしても気軽に使えるものがあるということは重要。学校だったら副教材、大人向けはリーフレットなど。街歩きとつながるような仕掛けがあるとより参加が広がる。 	

象限(カテゴリ)	キーワード(一部共通)	第2回懇談会プレスト	具体案(第3回ご意見等より)
③ 多文化共生・国際理解×子ども(学校教育)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのことを愛する、大切にするというところはやりやすい。ただ、他国を尊重するというところはすごく難しい。違いを知ることがまず第一歩で、違いを知った上で、一緒に何か考えていこうということが大事な姿勢。 ・交流事業等では、事前学習で色々なことを学んでから、その内容を相手に対して伝えていけると、深まり方、定着の仕方が違う。この流れを青少年にリソースとして提供していきたい。 ・市の平和事業等について、自分たちで情報をみつけるのは難しい。若い世代にどう広報していくか。 ・平和について興味があることを発信すると、意識高い系のような扱いを受けてしまう。世界で起きている情勢のほうから日本にフォーカスしていく方法のほうが、若者にとって身近なものとして扱える。 ・小中学生が同世代から話を聞くという試みはすばらしい。 ・ウクライナ侵攻により小中学生の意識が変わってきていることは全国学力調査のアンケートにも表れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高生と外国人との交流イベント(アート、食文化、おしゃべり会) ・お互いの「ちがいを」を知ると同時に、「みとめあう」ことの大切さを知る ・MIAによる講座、事業 ・外国人を招いて交流をする ・各国料理の給食 ・学校へ留学生(大学生)を招いて文化交流 ・平和についての「ものさし」を自分の中で持つ ・外国から来ている子ども達と日本の学生とが一緒に何かイベントを考え、両者がどちらも楽しくなれることをする ・様々なメディアから情報を読みとる技術を学ぶこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・MIAでは、たくさんいる外国人会員のの方々に講座を開いてもらっている。料理教室、壁画のアーティスト、音楽、洋画の先生など、そういった方を講師として様々な講座をやっている。小学生向けにも大人にも人気がある。 ・また、学校に留学生や外国人市民を派遣して交流をする、多文化共生の理解を深めることを進めている。 ・学校だけではなくて、例えば、音楽家を老人会の集まりで演奏していただくとか、お料理教室をやっていただくという派遣にも応えており、そういう機会は今後も増やしていくつもり。交流の機会は増やしていきたい。 ・外国人は支援してもらう側というふうに捉えがちだが、講師としてやっていただいたり、通訳もほとんど外国人の方が中心になっていたり、ボランティア、災害・防災フェアだとか、そんな形で外国人の防災委員さんが一緒に出て、一緒に活動しているということも最近非常に増えている。今後も、会員が増えており、そういったことを充実させていきたい。 ・小中学生に関しては、居場所機能として、外国人の子どもたちを毎週水曜日の放課後、宿題を見て、一緒に日本人の大学生のお姉さん、お兄さんと交流しようという試みもやっている。そういう身近なところの気づきだとか、小さな交流を持つということは頻繁に機会を増やしていきたい。 ・③④については、武蔵野市はかなり蓄積が進んでいる。 ・市では、アメリカ、韓国、昔はハバロフスクというところと子どもたちの相互交流を行っている。MIAだけではなく、市が関与する交流というのはいくらかの歴史がある。 ・まるっきり違う文化を子どもたち同士と一緒に体験するということは、ものすごいインパクトが強い。 ・武蔵野市が中学生、高校生世代を対象に行っている交流プログラムは、市レベルで言うところと相当珍しいぐらいやっている。今、韓国で2都市、忠州(チュンジュ)市とソウルの特別区の江東(カンドン)区と、アメリカのテキサス州ラボック市と、今は休止中だが、ハバロフスク市とやっている。 ・もう一つ、ルーマニアのブラショフ市と、今、オンライン交流は既に始まっているが、リアルな交流についてもやってみようと考えている。 ・青少年期、中学生、高校生の多感な、一番いろいろなものを吸収できるタイミングでプログラムを実施しているというのが武蔵野市の長所であり、これは継続していく意味のある事業ではないか。 ・何よりも外からみて子どもたちの変化がリアルにわかるぐらいなので、多分本人たちはかなり強烈に変わっていると思う。そのぐらいの、他を知る、自分以外というものが何なのかということを知るいい機会になっている。そこが平和というところを考える上で一番大切な違いを知るところにつながってくると思うので、非常に大きな密接な関係にあるのではないかと理解をしている。
④ 多文化共生・国際理解×大人(社会教育)		<ul style="list-style-type: none"> ・市内在住外国人の方々との交流活動 ・MIAによる講座・事業 ・在日外国人の方と一緒にボランティア→平和イベントと一緒に参加?(パネル、出店?) ・海外生活をしてきた方に実際の様子を語ってもらう ・文化交流(日本と母国) ・外国人市民との交流会(遊ぶ・食べる・学ぶ) ・英会話カフェ 	<ul style="list-style-type: none"> ・おそらく行政がやるべきところは、きっかけづくりが一番大事だと理解をしている。 ・行政が取り組むプログラムというのは安心感があるので飛び込みやすい。それを入り口にして、自分たちが次にステップしていくところにつながるというところを提供している。 ・参加してくださった方々が次に何か自分でチャレンジしてみたいなところにつながるというのが何よりの成果だと思う。それをなるべく応援できるような仕組みが少しまだ足りない。もう少しさらに応援できるようなことができるといい。 ・教育委員会で所管している生涯学習がまさにそうで、学びのきっかけづくりをするということが目標となっている。 ・今回も戦争を知るとか、多文化・国際理解を知るプラットフォームづくりということが必要なということを通通事項として考えていた。 ・市内にはいろいろな経験をお持ちの市民の方がいる。デジタルを使ったプラットフォームづくりができると、いろいろな市民の集合知がまとめられるのではないか。 ・日本が持っている文化でいうと、アニメーションはものすごい強い発信力を持っている。外国の人と結びついてくるきっかけとしても可能性はあると注目している。 ・難しさはあると思うが、あたらしいキャラクターをつくるか、そういう可能性は視野の中にいれてもいいのではないか。 ・本来の多文化理解は、相手のことを理解することだと思うが、世の中的には、日本が持っているアニメとかそういうものに外国人が関心を持つと、そこで接点が生じる。そういう多様な接点があるのではないかと思う。 ・共通言語にもなり得る。広めていくであったり、理解を深めるという意味で言うと、アニメというツールはすごく使えると思う。 ・武蔵野市は実はアニメ・漫画に関してはある意味聖地と言われている場所で、非常に大きなアニメのスタジオが幾つもあつた。そういったところと協力して物事を進めていくというのはありなのではないか。 ・武蔵野市は人的資源が豊富である。アーティストのコラボであつたり、そういった仕掛けが考えられる。 ・今の若い人たちに訴えかけるような文化の相互理解のためのツールを、新たなものを何か発掘したい。 ・武蔵野市の学生向けのインターンシップ等、そういうのができれば、日本に興味のある人が日本に来て、参加して、行政と一緒に考えて、自分の国と比べて、自分の国のいいところ等を還元してくれるのではないか。それに準ずるものができるとうい。